

## エッセイ 楽しい“虫音楽”の世界（その10 「虫供養」の音楽）

昆虫芸術研究家

柏田 雄三（かしわだ ゆうぞう）

日本人は古くから動物の供養を行い、各地にそれらの供養碑や慰霊碑がたくさん建てられている。動物慰霊碑、鳥塚、魚鳥塚、鳥獣慰霊碑、魚供養碑、蛙塚等であり、哺乳類、鳥類、魚類には個別の種の碑も数多い。哺乳類では馬魂碑、牛魂碑、豚霊碑、<sup>いのこづか</sup>豕塚、狸塚、猫塚、犬猫塚、鯨塚等である。昆虫には蟲塚、虫塚、蟲、虫等と書かれた「虫塚」があちこちにあるほか、ミツバチ、蚕、シロアリ、バッタ等個別の種類別の碑もある。さらには植物や針、包丁等の道具も含めれば、どのような供養碑がどのくらいの数あるのか正確には誰にもわからないだろう。

供養碑を前に供養祭が開かれることがあり、「虫塚」でも「虫供養」を行うところがある。《虫供養》という曲があることを知ったので早速CDを取り寄せた。虫の曲をいろいろ聴いてきた私にも《虫供養》は初めてである。尺八の竹保流の創始者である酒井竹保（1892～1984）が1956年に作った曲で、CDの解説書によると、戦前に箕面の西江寺の境内で大阪在住の文人や芸能人を集めて開かれた虫の声を聴く会の折に着想され、鳴く虫の音とはかなさを思い虫の命に祈りを捧げたものだという。



「虫供養」が収録されたCD  
酒井松道 竹を吹く第三集 SS-1003～5

13分ほどの竹保流尺八の本曲（古来からの尺八のみで演奏される曲）で、標準管長の一尺八寸の尺八2本で演奏されている。秋の夜の澄んだ空気を思わせる前半部分を経て、松虫や鈴虫等の鳴く音が2本の尺八の間で交わされ、やがて夜のしじまのなかに溶けこんでいく。鹿が鳴き交わす《鹿の遠音》や鶴の親鳥と雛が鳴き交わす

《鶴の巢籠（<sup>すこもり</sup>巢籠<sup>そうかくれいぼ</sup>）》等と比べると劇的な表現はほとんどない。虫の命を思い、鳴く虫が好きな日本人ならではの曲だろう。

西江寺では毎年秋に虫供養が開かれるそうだが、私が訪れたのはその時期ではなかった。境内には筆塚や花塚とともに風格のある「蟲塚」が建っていた。寺でいただいた説明書や箕面蟲供養万燈会の「蟲供養縁起」によると、奈良時代の行基菩薩（668～749）が都大路や津々浦々を行脚する折に道行くごとに虫の亡骸を腰に下げた壺に拾い集め、虫塚を建てて供養したのが虫供養の始めであると言う。明治時代に歌僧、藤村叡運僧正がなわの文人、墨客、風流人に呼びかけて「虫供養」が復興し、源光寺などを経て昭和14年に関西の虫どころである西江寺に移った。



箕面山聖天宮 西江寺 虫塚

ここでの「蟲」は昆虫にとどまらず森羅万象ことごとく「蟲」であり、人間もはだか虫であるとしている。つくばの農業技術研究所（現農業環境技術研究所）に1985年に建てられた虫塚には「蟲」の一字が彫られている。梅谷献二氏の解説によれば、ここでも「蟲」は昆虫ではなく広義の虫を指す。

私は虫塚を始めとして折に触れいろいろ供養碑を訪ね歩いている。今年6月につくばの農業環境技術研究所で行われた「蟲の日」に参加し、あいにくの雨の中での「虫供養」にも参列した。

錚々たる農業昆虫の研究者が一堂に会されたのは壮観であった。まさに「虫供養」の取り持つ縁なのである。